

ブックレビュー

妊娠はだれのもの？

—S・カレンバーグほか『経済学と知—ポスト/モダン・合理性・フェミニズム・贈与—』(2001=2007) —

Do Women Own Pregnancy?

Stephen Cullenberg et al. (eds.) *Postmodernism, Economics and Knowledge*

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員 奥村 則子

S・カレンバーグほか編著『経済学と知—ポスト/モダン・合理性・フェミニズム・贈与—』(長原豊 監訳、御茶の水書房、2007年)は、Stephen Cullenberg, Jack Amariglio and David F. Ruccio (eds.), 2001, *Postmodernism, Economics and Knowledge*, London and New York: Routledge, 495+xv ps. 所収の19編の論文を翻訳したものである。ここでは、Hewitson 論文を取り上げて紹介する。Gillian Hewitson「新古典派経済学における性別化された身体の否認」(足立眞理子訳)は、新古典派経済学における代理出産契約モデルをフェミニスト的なポスト構造主義理論を用いて分析している。

代理出産契約は、子を持つとするとする人と妊娠のサービスを提供する人^{じよせい}の間で結ばれる。契約に際して交換されるものは、子宮で受精卵を養育するという身体的サービスとその代価である。近代の個人は、自己の労働力に対して自分自身に所属する商品として、自由に処理しうる関係にあるのと同様に、自己の身体的サービスに対しても、それを所有し、自由に処理しうる関係にあると仮定されている。したがって身体的サービスそのものは、行為者の人格から分離、切断可能なものとみなされる。

子宮—資本という隠喩

Hewitson は、〈資本—としての—子宮〉という隠喩を用いて、フェミニスト経済学の立場から、主流の新古典派経済学の理論的説明を検討する。新古典派経済学では、妊娠女性の身体は、資本—としての—子宮という隠喩によって書き換えられる。代理母は、身体を資本へと変換させ、自己所有する資本から派生するサービスを売却する契約主体となる。身体に関わる交換を資本から派生するサービスの売却として描くことは、性別化された主体を削除して、合理的な経済主体に変換し、脱性別化された単性モデルを作り上げることであるという。「女性」が交換モデルに組み込み可能となるのは、この方法であるとし、女性の身体は、一方では排除されながら、経済的行為者の男性性を構築するための土台の役割を果たしていると指摘する。

母性と契約の根源的対立

自己利益を追求する「合理的な経済人」として、交換モデルに組み込まれた代理母女性は、しかし、語義矛盾した存在である。長きにわたって「女性」と「貞淑で自然な母性」

とが同一視されてきた西欧的言説にとっては、「合理的な経済人としての女性・母」は、自然的なことと契約的なことの分割を侵犯する存在であるからだ。このことは利他的な代理母は容認されるが、商業的な代理母は禁止される傾向にもみてとれる。自然的なことと契約的なことの分割は、保持されなければならない。

Hewitson は、新古典派経済学が、自然的なことの領域と交換の領域との分割に依っていることを鮮やかな読解で示してゆく。母性と契約との二項対立を保持するためには、代理母でも契約者でもない「真の母」が生産される必要がある。「代理母」という表現、あるいは契約妊娠一般は、真の、他の、母親の存在に依っている。

代理母も真の母も

代理母の母性としての地位は、新しい生命の源泉を依頼側の男性に位置づけることで、さらに劣位に措かれる。「契約を欠いたところに子供はない」わけであるから「生産の〔子供を産む力をもつ／利益をうみだす〕エネルギーは、男性のものである」とされる。

妊娠は、契約に服従あるいはコントロールされ、契約行為者の「母性本能」を排除しながら、他方で同時に、依頼側の妻の母性本能を上位に措き、契約したがって父親に生殖力ある再生産の力を保証し、そして何より重要なことは母親と契約、自然と文化、男性と非－男性といった二項間の境界を保全するのである。(223-224 頁)

これが新古典派経済学の代理母交換モデルである。新古典派経済学の理論装置からすると、真の母も代理母も、つまるところ、子を持つとした男性のための産む機会／機械とみなすことが可能になるだろう。妊娠は、いったい誰のものなのか。女性の行為者と女性の身体が抜き差しならない役割を果たすかに見える代理母交換であるが、代理母も真の母も非－男性として、男性との二項対立を形成する力学の元に置かれている。代理母契約という事例を通して、新古典派経済学に加えられた Hewitson のポスト構造主義的読解は、経済学におけるジェンダー化された主体を明示している。

フェミニスト経済学と知

本書には、他に、脱構築を主要なモチーフとする J. Rossetti 「ポストフェミニズムとフェミニスト経済学」(徳永理彩訳)、S. Hargreaves Heap 「ポストモダン性、合理性、公正－正義」(佐藤良一訳)や、合理的個人モデルの考えうる極限をさぐり、フェミニスト的主体の考察を行っている S. Charusheela 「女性の選択と自文化中心主義／相対主義のジレンマ」(本山央子訳)も収められている。また、「第VI部 贈与」の3論文が示唆する地平から考察すると、上述した近代的個人の身体自己所有論も、ちがった光景で見えてくる。

フェミニスト経済学、そして知の新しい視界を拓く書である。